

〔当評論中解りにくい部分を他評論（右項）で補足〕

『生き甲斐といふ事』内文章	他詳論上における同一的文章。或いは左項の補足的説明。（括弧内は吉野注）
<p>P 3 0 6 「生き甲斐とは生の充實感（D 3）。それが今日何處にも無い」とは・・・即ち「生き甲斐」は、全體C⇒宿命D 1⇒自己劇化D 2⇒生き甲斐（充實感・實在感D 3）」と言ふ、結果論的に齎されるものなのだが、それが自己欺瞞され「D 3」ではなく「C」化（目的格化）」されてしまった、と恆存は言つてゐるのではなからうか。</p> <p>⇒後述P 3 1 6</p>	<p>参考：「自己劇化は自己より大いなるものの存在（全體・絶對）を前提として、はじめて存在する。自己は自己を表現しきれぬばかりでなく、自己は自己を劇化しきれない。（何を敵〔仕へる対象、即ち全體・絶對か個人か〕として選んだかによつて、そしてそれといかにたたかふかによつて、はじめて自己は表現せられる）」。（「自己劇化と告白」全2：P 4 1 5）そしてその行爲から結果として、生き甲斐（充實感・實在感D 3）が齎されるのである。</p>
<p>P 3 0 6 「醜の御楯」（天皇の楯となって外敵を防ぐ者。武人が自分を卑下するという語）としての生ける標（生き甲斐）の喪失。</p> <p>「生き甲斐の如き本質的な事柄において日本人の關心を引くのは、常に心懸であつて行爲ではなく、意であつて形ではない」とは、何を言はんしてゐるのか・・・⇒右項目</p>	<p>「本質的な事柄」とはD 3 實在感の問題を指す。「心懸」とは場（C）から齎される関係（D 1 心の動き・気分・意）。</p> <p>「行爲」とは「D 2 自己劇化」であり「心の動きを形ある物として見せる」行爲の事。</p> <p>「形」とは意の形態化（so called 化）。即ち左項は、戦争の「罪惡感」なら罪惡感の気分（D 1）に浸つてゐるだけで、其処に「似非生き甲斐（感傷?）」を見出して満足し、戦争（場C）⇒罪惡感（宿命D 1）⇒行爲（自己劇化D 2）⇒生き甲斐（實在感D 3）といふ、行爲的結果としての眞の「生き甲斐」とは違ふと言ふ事では。（「意（気分）は似せ易く形は似せ難し」）</p>
<p>P 3 0 9 「歐米の市民は經濟主義に徹し民主主義と言ふメカニズムを通じてのみ政治に參與」とは、何を言はんしてゐるのか・・・⇒右項目</p> <p>及びP 3 1 2で同一指摘。</p>	<p>参照：「テキストP 9」</p> <p>A(上)の最拡大化（科学・合理による実証化・客體化）による政治との最小的關係保持。その方法論の最も巧い國民は英國人だと恆存は言ふ。⇒『私の英國史』参照。</p>
<p>P 3 1 0 明治以降の日本人は「利己心をすべて惡しきものとして抑壓した・・・」</p>	<p>上述『肉體の自律性』文の、「明治以降の日本人はあらゆる物質的なこと、肉體的なことに、すべて精神のベールをかぶせ・・・」</p>

<p>P 3 1 0 日本では「個人的、家庭的、職場的、社交的その他のあらゆる不満と期待とが政治に懸けられる」とは、何を言はんしてゐるのか・・・。</p> <p>西歐では、實證主義による自然科學的・社會科學的客體化（テキストP 8 圖）がそれぞれの分野に置いて實現されるに従つて、「近代市民社會」が形成され、その結果として個人の利己心は集團的自我上（A）のそれぞれの場（C”：個人的、家庭的、職場的、社交的）に置いて合理的満足化が圖られ、過去の世紀のやうにA的不満を「A⇒B擦り替への自己欺瞞」とする必要性がなくなつた。しかし非「近代市民社會」の日本では、形態が適應異常による「テキストP 9 圖」の爲、集團的自我（A）の狹窄は變はらず、その爲に「A⇒B擦り替への自己欺瞞」の必要が無くなつた「惡平等主義＝戦後民主主義」の日本では、今度は「不満と期待とが政治に懸けられる」やうになつた、と言ふ事では。</p>	<p>左項の事は以下の事柄に關聯してゐる。・・・</p> <p>恆存は言ふ。「個人主義（テキストP 8 圖）を経験しない（日本）國民が個人の限界を口にするといふことは言語道斷」であると。そして戦後知識人がその欺瞞をしてゐるのだと。即ち彼等は、戦争中の個人敗北の後ろめたさを隠蔽すべく、外來思想（新漢語：「個人主義」）の權威を「自己保存の後楯・護符（C 2 化：下欄圖參照）」にした、と恆存は指摘（參照：『近代日本知識人の典型』他）するのである。そして、戦時中の日本人の「個人の敗北」は、「個人主義の限界」などではなく、ただの「物質（A：暴力・ファシズム）に對する個人の敗北」でしかなく、もとより「近代自我（個人主義）の敗北」などとは全く關係がないのだとその自己欺瞞を鋭く剔抉する。故にその後ろめたさを隠蔽すべく「A⇒B擦り替への自己欺瞞」の必要性が発生するのである。そして戦後はその必要性がなくなつた。（參照：P 6 0 2 全一『小説の運命 I』・P 6 1 全一『現代日本文學の諸問題』）</p>
<p>P 3 1 0 （日本人の）上記の如き「自己欺瞞を通用しにくくさせたものは、社會主義思想、或はマルクス主義であつた」。とは、何を言はんしてゐるのか・・・⇒右項目（個人は社會への有用性としての価値へ転落）の事では。</p>	<p>「個人的價值に對する社會的價值の優位」⇒個人は社會への有用性としての価値へ転落。それを二十世紀は「二十世紀の理想」として引き継ぐ。</p> <p>① B（個人・藝術）のA（社會）への奉仕。社会革命に奉仕（民主主義文學＝プロレタリア文學の延長として）。（P6 3 全一『現代日本文學の諸問題』）</p>
<p>P 3 1 0 「幕末維新の混迷・・・」とは、何を言はんしてゐるのか・・・⇒右項目</p>	<p>「福沢諭吉以下の明治洋學者達を、私は評価しえない。彼等の多くは、「和魂」も何もあつたものではない。所詮は地方階級武士の劣等感に基づいた立身出世主義（「プラス2の利己心」）が國家有用の實学といふ考へと結びついたのでに過ぎまい」（『論争のすすめ』）</p>

<p> P 3 1 0 利己心とは：「マイナス 2 の利己心とプラス 1 0 の國家意識、即ち憂國の士（－A⇒B 擦り替への自己欺瞞）」も「プラス 2 の利己心とプラス 1 0 の國家意識、即ち立身出世主義者（＋A⇒B 擦り替への自己欺瞞）」も、どちらも利己心への後ろめたさからの「國家意識と言ふ大儀 C” 的自己犠牲 B」への、利己心 A の自己欺瞞（A⇒B 擦り替へ）でしかないと言ふ事。テキスト P 9 の日本的構圖上では。 </p>	<p> 「テキスト P 8」西欧構圖では、國家意識は A 上の概念であるものが、「テキスト P 9」日本的構圖では、B 上（自己犠牲）の對象と言ふ神的概念（大儀 C”）になつてゐる。これも西歐近代「テキスト P 8」への適應異常では。 </p>
<p> P 3 1 6 下 「利己心 A を大義名分 C” でごまかす偽善」とは、何を言はんしてゐるのか……。【＋利己心 A ⇒ 自己犠牲 B 擦り替へ⇒大義名分 C”】と言ふ圖である。 </p>	<p> 次頁圖参照：非近代國家日本では、「テキスト 9 圖」での目的格（大儀 C” 的概念）の変格活用が行はれただけ、と言ふ事では。・・・國家 C” ⇒ 「上位概念 C 2：世界・社會・階級」⇒ 生き甲斐 C”（その後楯として「大思想 C 2」） </p>